

恩師の近況

チャペルでの結婚式

87年卒 進藤幸治  
1993年10月2日に母校名古屋学院大学のチャペルで結婚式を挙げてから、もうすぐ2年が過ぎようとしています。



結婚という一文字を外から眺めているのと、実際に自分達が当事者となつて、関わっていくのでは大変な違いがあることを実感しました。結婚しようと決めて、周囲の商業ベースにのつとつた式や披露宴はしたくないと思っていました。が、ではどうするか、ということになりました。そこで、私達にとつて何が大切か、ひとつずつかたちにしていくことから始めました。幸いお互いの両親からも本人同志の望むように、という理解が得られて、なるべく手作りで、と考えていました。その時、母校のチャペルで式を挙げたいと思つたのです。

その旨を木村先生から大学へ伝えていただき、その後直接お話を伺いに出かけ、10月に林先生に式を挙げていただくことになりました。

当日はチャペルの椅子の背に花とリボンを飾りつけてもらいました。親戚・友人の見守る中、オルガンの音色が響き式が始まりました。チャペルの窓から樹々の緑が美しく、都会の中では味わえない静けさの中で式は終り、長かったような、一瞬だったような不思議な時間でした。

自分達の手作りでと言いつつ、二人だけでできるものなど何もなく、お忙しい中、準備もふくめ時間をとっていただいた母校の先生方、オルガンを演奏して下さいました。有田さん、色々手伝ってくれた友人、見守ってくれた両親、沢山の友達のおかげで新しい生活のスタートをさせていただきました。ありがとうございました。あの日のチャペルでの暖かな気持ちを時々思い出して、お互いの誓いが錆びつかないように、過ごしていきたいと思っています。

チャペルでの学式等のお問い合わせは、同窓会事務局まで



近況雑感



商学部長 小島博

商学部長 小島博  
商学部長が経済学部商学科から平成四年に改組独立してから三年半、来年三月には初の卒業生を送り出すことになる。就職氷河期といわれる今年、四年生の多くが夏の暑さも忘れ企業訪問に明け暮れたであろうことを思うと胸が痛む。希望の企業に内定したという報告を受けることはとすると、商学部のモットーは、変化絶え間ない社会にあつて個性豊かに実力を発揮し活躍できる有為な人材を送り出すことであり、その実現のために商学部教員は丸となり種々の工夫を凝らし熱意をもちつて特色ある教育の実施に尽力してきたと自負しているが、社会がどこまで評価しているかは定かでない。多くの企業や社会が商学部の教育の質の高さを理解してくれればと願うところである。

私は学部設置とともに商学部長という大任を仰せつかったが、多くの先輩・同僚の協力を援助により大した失敗もなく何とか無事に学部の完成年度を終えそうに思える。何事も一人でできることはない、皆球に感謝している。

今年、三月に商・経両学部の春の短期留学生送出し先であるフェレイレイティンソン大学とニュージャージー州およびニューヨークの大学教員を訪問した。ここでは、日本とアメリカの大学の規模、機構の違いに感銘した。七月には、商学部

と提携している中国の河南省鄭州にある河南财经学院大学を訪問した。中国の発展ぶりに驚嘆したが学生の猛進強ぶりにも驚嘆した。大学も日本の中だけで考えてはいけな時代なのだ痛感した。商学部は世界に通用する存在でありたいものだと願望を抱いた。商学部の更なる発展を目指し教員一団の団結と熱意で前進しなければならぬと思つている。

大学に就任して二十年、あつという前の出来事のように思える。卒業生から何年振りか年に賞状をもらうと嬉しくなる。今年の一月の大震災の時、これまで音信のなかった人が電話をくれたり葉書をくれたりすると被災を忘れて嬉しくなった。何より怪我もなく無事だったことが嬉しいが、見舞ってくれた人の連れ合いに感謝した。七月末にやつと交通機関のボートライナーが復旧したが港の周辺は手付かず、町の中心部は解体作業の真っ最中。それでも、時間は何もなかった事と同様に過ぎてゆく。これらの都合良く時間は止つてはくれない。大学の競争も同じで、世間は本学の都合などお構いなしだ。やつと四年目を迎えた商学部も助走の段階、競争に打ち勝つためには自らの努力だけではなく卒業生諸君を初め多くの人々の励ましと助力が必要だ。復興に数年を要するとされる神戸の現況と合わせ大学の将来を考えるこの頃である。

